

大分県立先哲史料館 夏休み企画展 映像化事業関連展示

「4人の先哲－資料でひもとく大分の先哲－」

7/17(土)～8/29(日)

○ごあいさつ

大分県立先哲史料館では、ふるさとや日本の歴史・文化の発展に貢献した「おおいたの先哲」について、『大分県先哲叢書』でみなさまに紹介してきました。そして、一昨年から『大分県先哲叢書』普及版を題材に、挿絵と先哲ゆかりの写真などで生涯や業績をまとめた映像「おおいたの先哲」の動画配信を進めています。みなさまに、先哲を身近に感じていただけるよう、ナレーションは県内の高校生が担当しています。展示室前やホームページ、動画サイトなどから視聴できますので、是非ご覧下さい。

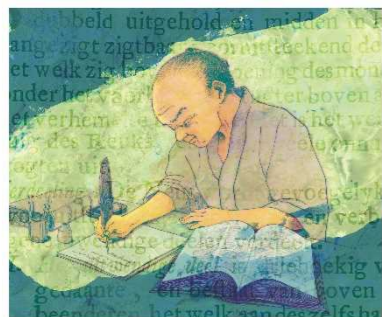
今回の展示では、昨年度に映像を制作した前野良沢・広瀬淡窓・大蔵永常・矢野竜溪の4人の生涯や人となりや挿絵や関連資料を紹介し、展示を通して、郷土の先哲にいつそう興味・関心を持っていただければ幸いです。



【先哲映像】

こちらから視聴できます。

★ 前野良沢 1723年(享保8年)～1803年(享和3)



江戸時代に活躍した中津藩の医師、蘭学者(オランダ語を通して、日本に入ったヨーロッパの学問を研究する人)です。辞書のない時代にオランダ語で書かれた解剖書を翻訳して『解体新書』をあらわしました。強い信念を持って、一生をオランダ語の研究にささげ、日本の蘭学の発展に大きく貢献しました。

○人の体の中ってこんなの??? 『蔵志』(復刻版)

都の山脇東洋が宝暦9年(1759)日本初の解剖書『蔵志』を出版しました。彼は、京都で亡くなった人の解剖を見学し、人体の構造は西洋の解剖書の図と同じだと主張しました。この時のことを杉田玄白は、知人から聞いていました。オランダ語で書かれた内科に関する本です。奥平昌鹿は、この本を買い、自分の印を押して、良沢に貸したと言われています。

○長崎に行くことができる! 『記註撮要』(中津市歴史博物館蔵)

明和6年(1769)11月、良沢は中津藩から長崎へ勉強に行く許可を得ました。

長崎では、オランダ通詞(オランダ語の通訳)からオランダ語を積極的に学びました。「ターヘル・アナトミア」などの蘭書(オランダ語の本)を買い、江戸へ戻りました。

○良沢のオランダ語の力でできた 『解体新書』

江戸の骨ヶ原(こつがはら)(東京都荒川区)で解剖の様子を見て、「ターヘル・アナトミア」の図と同じことがわかり、良沢と玄白らは明和8年(1771)年3月5日から翻訳を始めました。安永3年(1774)8月に『解体新書』として出版できました。

○えっ?良沢の名前が無い? 『解体約図』(三浦梅園資料館蔵)

安永2年(1773)年玄白は、『解体新書』の出版予告のチラシを江戸で作りました。これに載せられ図は、『解体新書』の図とは異なっています。玄白は、自分ひとりで訳し「解体新書」と名づけたように書いています。良沢の名前はありません。

○オランダ語の研究成果はこれだ! 『蘭学階梯』

良沢の弟子大槻玄沢がまとめた蘭学の入門書です。良沢が自分で研究成果を発表しないので、代わりに玄沢が天明3年(1783)に本にしたようなものです。良沢の人となりや、現段階で残されていることが確認されていない著書名などがこれからわかります。

○わずか21回で書いた

8代将軍徳川吉宗の命でオランダ語を学んだ青木昆陽の書いた本です。江戸の将軍に挨拶に来た長崎のオランダ人に、21回会って習得したオランダ語の成果です。昆陽は、良沢が初めて入門したオランダ語の先生です。

○『良沢の頭の中 オランダ語がぐるぐる』

中津藩の医者であった良沢は、医者の仕事よりもオランダ語の研究に突き進みます。オランダ語の本を何でも読めるようになりたいと、辞書で意味を解き明かすことを心がけて過ごしました。周囲から何といわれようと、人に惑わされず、自分の信じる道をひたすら生きました。

○日本初のロシア史の本も良沢 『魯西亜本紀』

良沢が71歳の時にオランダ語の『新旧ロシア帝国誌』などを読み、寛政5年(1793)に完成した本です。この頃、北海道にロシア人が来るようになり、幕府はロシアの情報を集めていました。老中から依頼された仕事かもしれません。

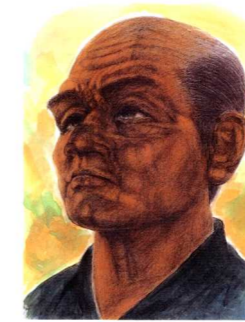
○翻訳の苦勞 これを読めばわかる 『蘭学事始』(復刻版)

良沢の死後、玄白が蘭学の始まった頃の思い出をまとめました。この本は写本で伝えられていましたが、明治2年(1869)、福沢諭吉が資金を出して『蘭学事始』として出版しました。この本で良沢の性格や行動もわかります。

○感極まり、泣いた諭吉 『蘭学事始再版の序』(『福澤諭吉全集』第19巻)

諭吉は、「蘭学事始」を読むたびに良沢らの苦勞や勇氣、誠意などに感動して涙を流したそうです。「一滴の油」(池に落とした一滴の油が次第に広がる)のように、諭吉は良沢らの仕事が文明開化につながったと考えました。

★ 大蔵永常 1768年(明和5)～1860年(万延元)



江戸時代の三大農学者の一人に数えられています。少年時代に飢饉を目にしたことから、人々の豊かな生活を願い、農学に生涯を捧げました。全国各地を自ら調査し、試行錯誤を重ねながら商品作物の栽培・加工方法を習得していきました。その結果を『農家益』や『広益国産考』など、多くの本にまとめ、農業技術の発展に貢献しました。

○遊び場は棕の木

明和5年(1768)、永常は豊後国日田郡隈町(日田市隈町)に生まれました。家の裏には三隈川が流れ、その岸には1本の大きな棕の木があり、幼い頃の遊び場でした。現在、生家の跡には「大蔵永常先生生誕之地」の石碑が建てられています。

○一年間お世話になります

永常は、江戸を拠点に関東各地を歩き回りました。ここでは、“予一年下総下野辺の農家に滞留し・・・”とあるため、現在の千葉県・茨城県・栃木県の辺りの農家に一年ほど世話になりながら調査していたことがわかります。

○やっぱりハゼでしょ! 『農家益』

永常が大坂に住んでいた時に、最初に出版した農書です。ハゼの育て方やハゼの実から蠟(ろう)を作る方法について、挿し絵付きでわかりやすく紹介しています。九州各地をまわり、体験したことや見聞きしたことをもとに著しています。

○田んぼにクジラ?! 『除蝗録』

稲の害虫(蝗など)を追い払う方法を紹介した農書です。鯨油などを水田にそそぎ、その油へ虫を払い落とし、呼吸ができないようにします。こうした方法は、筑前国(福岡県)で行われていたものを、永常が各地に広めました。

○江戸のレシピ本 『徳用食鏡』

飢饉に備えての料理の工夫について述べた農書です。米にいろいろなものをまぜて炊く方法や、粟粥や饅頭の作り方などについても書いています。大分県の郷土料理として伝わる豊後黄飯や豊後鮑腸なども紹介されています

○やっぱり鍬が好き! 『農具便利論』

日本各地で使われている農具を調べ、ほかの地域にも広めた方がよいと思ったものを紹介しています。特に、鍬については詳しく説明しており、刃の長さや幅、刃と柄との角度にいたるまで細かく書かれています。

○豊かな暮らしを願って 「真多呂人形学院大分支部」制作

大蔵永常の「木目込人形」です。木目込人形は、江戸時代半ばから受け継がれる伝統工芸品で、その技法を今に伝えるのが「真多呂人形」です。矢立を手に諸国を調査して回る姿を表現しています。人々の豊かな暮らしのために注いだ永常の情熱が伝わってきます。

★ 広瀬淡窓 1782年(天明2)~1856年(安政3)



日田の商家に生まれた江戸時代の学者・教育者で、「豊後三賢」の一人にあげられます。家業は弟にゆずり、自らは学問・教育に専念しました。私塾「咸宜園」では、門下生を身分・学歴・年齢の区分なく平等に扱いました(三奪法)。また、努力したことが評価される教育のありかたにひかれ、塾には全国から多くの人材が集まりました。

○勉強に“全集中”

淡窓の自伝「懐旧楼筆記」は、“天明二年壬寅四月十一日余生まれたり”と始まります。父は、日田広瀬家の5代目三郎右衛門(桃秋)です。幼い頃から勉学に優れ、久留米藩(福岡県)の松下西洋や筑前(同)の亀井南冥・昭陽親子らの指導を受け、教育者としての基礎を築きました。

○教師に向いてるよ！

幼い頃から病弱で、10代後半で大病に見舞われた淡窓の命を救ったのは、医師倉重湊(みなど)でした。これが、運命的な出会いとなりました。その後も2人は交流を持ち続け、将来について悩む淡窓に、湊は儒学の塾を開くことを助言し、教育者へと導きました。

○“食べ過ぎちゃった”は・・・●

淡窓は、「天を敬い善い行いをすれば報われる」という敬天の考えに基づき行動し、善悪の行いを「万善簿」に記録しました。善い行いは○、食べ過ぎは悪い行いで●を記すなどして、善い行いの数を積み重ねるものです。1万善を目指し、約12年をかけて達成しました。

○世界に一人だけの君 「咸宜園図」(複製)

文化14年(1817)、淡窓は咸宜園を建てて桂林園(荘)から移りました。「咸宜」とは“咸宜しい”という意味で、塾生一人ひとりの個性を大切にすることを淡窓の思いが込められています。この図は、淡窓生誕130年祭の際に、描かれたものです。

○やばい！もっと勉強しないと 「月旦評」(写真)

月旦評とは成績表のことです。月の初めに試験により塾生の学力評価を行い、一覧表にして公表しました。文化2年(1805)に成章舎において始まりました。その後工夫を重ね、最終的に無級から9級までの形が出来上がりました。

○やっと出せた！ 『遠思楼詩鈔』

上下2巻の漢詩集で、淡窓にとって初の出版物でした。出版までに長い年月がかかりました。亀井昭陽や帆足万里らが序文(本文の前に記す文章)を書いています。「遠思楼」とは、淡窓が晩年に使用した書斎の名前です。

○咸宜園恐るべし！ 『安政三十二家絶句』

七言絶句(1句を7語で記す漢詩の形式)を集めた本です。淡窓の名前が最初に記されています。その他、弟の旭荘や養子の青邨らが含まれており、咸宜園関係者が、当時一流の漢詩人として認められていたことがわかります。

○夢かぁ～

淡窓の五言絶句です。タイトルは「記夢(夢を記す)」で、夢の中で富士山の頂上に座り、天への扉を押し開いたことを詠んだものです。建は、淡窓の名です。天保8年(1837)に刊行された『遠思楼詩鈔』初編の上巻に収められています。

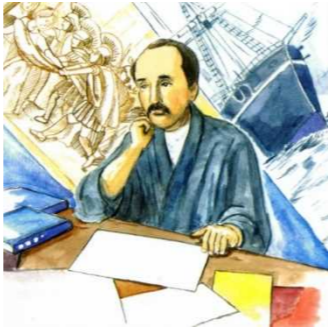
身踞芙蓉頂天関手自開夢  
中知是夢猶恐喚醒來  
【読み下し文】  
身は芙蓉の頂に踞る  
天関手自ら開く  
夢中には夢なるを知る  
猶恐る喚び醒まし來たるを  
※芙蓉・富士山

○英彦山詣で 廣瀬淡窓七言絶句屏風

6曲1隻の金屏風に淡窓の七言絶句の漢詩6点を貼っています。「建」は淡窓の名前、「苓陽」は号です。左から2番目の漢詩は、病弱だった淡窓が、“病気を治したければ、英彦山の神に祈るように”という夢のお告げ通りにしたら本当に治ったため、お礼に参詣した時の詩です。

「廣瀬淡窓七言絶句屏風」  
一扇 南郷吹笛北彈琴 獨閑陳編對短檠  
借間城中三萬戸 幾人深夜聽秋声 廣瀬建  
南郷笛を吹き北琴を弾く 獨り陳編を閑し短檠に對う  
借間す城中三萬戸 幾人か深夜秋声を聴く  
二扇 處々旗亭酒易除 行人終日不思家  
筑江西去瓊瑤浦 一路秋風菌萑花 苓陽  
處々の旗亭酒除り易し 行人終日家を思わず  
筑江西に去れば瓊瑤浦 一路秋風菌萑の花  
三扇 鶴背仙遊難漫期 今宵何夕轉相思  
瑤簫吹破江南夢 月上梨花第一枝 建  
鶴背の仙遊漫に期し難し 今宵何の夕か轉相思す  
瑤簫吹破る江南の夢 月は上る梨花の第一の枝に  
四扇 溝渠水は瘦せ石嵯峨 十月郊原總穫禾  
縱有晚霞能借色 霜林紅葉已無多 苓陽  
溝渠水は瘦せ石嵯峨たり 十月の郊原總禾を穫る  
縱い晚霞の能く色を借るあるも 霜林の紅葉已に多き  
こと無し  
五扇 彦山高處望氤氳 木末樓臺晴始分  
日暮天壇人去盡 香烟散作數峯雲 廣瀬建  
彦山高處望み氤氳 木末樓臺晴れて始めて分る  
日暮天壇人去り盡し 香烟散じて數峯の雲となる  
六扇 書樓開在兩峰間 倦鳥歸雲意自閑  
天為君家鐘鐘福壽 宝山相接萬年山 苓陽廣瀬建  
書樓開きて兩峰の間にあり 倦鳥歸雲意自ずから閑なり  
天君が家の為に福寿を鍾む 宝山相接す萬年山

★ 矢野竜溪 1850年(嘉永3)~1931年(昭和6)



佐伯出身のジャーナリストで、本名は文雄といひます。藩校の四教堂で学び、後に慶應義塾で諭吉に学びました。明治時代を中心に教師・新聞記者・役人・政治家・作家・外交官などとしてマルチに活躍しました。明治維新後の日本を知性や品性を持つ人々が支える紳士の国にすることをめざしました。

○佐伯に生まれた秀才 「明治四年頃佐伯藩時代屋敷図」

竜溪は嘉永3年(1850)、佐伯藩士の父矢野光儀と母コマとの間に生まれました。8歳で佐伯藩の藩校・四教堂に入り、学問や武術に熱心に励む少年時代を

送りました。学業の成績は抜群で、16歳の時には藩から「学問出精」を賞されました。

○ジャーナリストデビュー 「郵便報知新聞」(複製本・写真)

明治9年(1876)1月7日、竜溪は「政略篇第一社会の集点」という記事で、『郵便報知新聞』に初めて登場しました。その後も自身の意見を社説欄に寄稿し続けていた竜溪は、同年8月に社員として採用され、数多くの記事を書きました。

○日本には憲法と国会が必要 「明治会堂演説之図」(複製)

竜溪は、福沢諭吉が中心となって作った交詢社の一員となり、私擬憲法の草案を作成したり、自分たちの主張を広めるために演説会を開いたりしました。また、政府内でも大隈の求めに応じて国会開設の意見書を作成し、国家の変革を訴えました。

○ベストセラー作家 矢野竜溪 『斉武名士 経国美談』

明治16年(1883)、古代ギリシャの歴史をもとに、政治の話をつかりやすく伝えるために書いた小説です。竜溪は“人間は本来自由で、平等に政治に参加する権利がある”ということを説こうとしました。ベストセラーとなり、多くの人たちに読まれました。

○ヨーロッパに行ってきます 「矢野龍溪書簡」

明治17年(1884)4月、竜溪は『経国美談』で得た利益をもとにして、政治や社会の仕組みを学ぶために、念願のヨーロッパ視察に旅立ちます。出発を目前に控えた竜溪が、不在中の立憲改進黨のことや、郵便報知新聞のことを気にかけている様子うかがえます。

○ヨーロッパってこんな所 『周遊雑記』

視察先のロンドンから報知社に原稿を送り、竜溪が帰国する前の明治19年(1886)に刊行された海外通信です。政治・経済・教育・文学・芸術や、街頭で見聞きしたことまでくわしく述べられており、竜溪の関心の高さや、するどい観察力を知ることができます。

○念願の国会は開かれたが… 「帝国議會衆議院銘鑑」

明治23年(1890)7月、日本初の衆議院議員総選挙が行われました。しかし、竜溪は健康上の理由として、すでに政界を引退していました。その後竜溪は、政界と遮断された場所として宮内省の役人へと転身し、天皇の侍従として国会に立つことになりました。

○新スタイルの雑誌を作ろう 『近事画報 改題 戦時画報』

竜溪によって発案された『近事画報』は、写真と挿絵を中心とした、これまでの日本にはなかった形式の雑誌です。明治37年(1904)に日露戦争がはじまると『戦時画報』と題名を変更し、発行部数を伸ばしました。竜溪自身も「出鱈目の記」という随筆を連載し、好評を博しました。

○竜溪先生、教えて下さい 「矢野龍溪宛国木田独歩書簡」

『戦時画報』の編集は、竜溪と親交の深かった国木田独歩が担当しました。独歩は、徳富蘇峰の紹介で竜溪と出会い、竜溪の世話によって教師となり、佐伯で1年間を過ごすことになりました。『戦時画報』の編集にあたって、独歩が竜溪を頼り、指針を求めている様子うかがえます。